

現今資本主義の諸局相

——「近代（モダニティ）」概念は認識論的障害であるか——

鹿児島大学

桜井芳生

1 目的:我々の属しているこの「現今」資本主義の諸フェーズを考えてみる。そのさい、「近代（モダニティ）」概念は認識論的障害でないか、反省してみる。/ 2 方法:社会科学における古典的理論諸家の議論を援用した思弁（スペキュレーション）を行い、また脳科学の成果を援用する。

3 結果:現今資本主義の成立のための諸・必要条件のなかで、そのときそのときで、成立が比較的困難な必要条件、すなわち、希少な（あり・がたい）条件が、そのときそのときで、いわば火急の解くべき問題として、意識されてきたのではないか。「自由な労働者」の創出・存在…a。「産業資本が成立するための一定の閾値を越える資本の蓄積」…b。「勤勉な労働者」の創出・存在…c。「利潤を、浪費も吝嗇せず、再投資しつづける資本家」の創出・存在…d。「流動性選好」をおぎなっておりあまりある「有効需要」の存在…e。通常、ポストモダンとの対比で、モダン（近代）といわれるときには、あるいは産業資本主義の立ち上げに関連したものとしては、上記のc, dに対応していわれることが多いようにおもわれる。しかし、ヴェルナー・ゾンバルトの『恋愛と贅沢と資本主義』『戦争と資本主義』などをみると現今資本主義の立ち上げ期から、要件eは、「課題」であったのであり、それは、「恋愛」「贅沢」「戦争」などによって、クリアされてきたといえそうである

現在における脳科学の成果を援用すると、各人の脳は「中国の歴代王朝が編纂した「正史」のようなものがたりを、みずから語り・弁証（いいわけ）することが多くなる。」といえる。中野孝次の『清貧の思想』ならびに、その文庫版（1996年刊）への内藤克人の「解説」のなかに、そのような口吻をみいだすことができるのではないか。「本書にも描かれたヒトビトの実生活に貫かれた節度と規範が、時代を超えて人間生活の原理であることを、（本書は）説いている。（:268）」（内藤克人「解説」）。中野の『清貧の思想』の後「うしなわれた20年」を経て、橋本の『ロスト近代』が出現した。そこでは、露骨に「資本主義の新たな駆動因」が、模索される。「こうした新しい生活の現象を、一つの言葉でくくることは難しい。だがそこには、共通する一つの志向すなわち「自然の本来的価値」への志向があるといえないだろうか。」（:25）といわれる。

4 結論:私は、「近代（モダン・モダニティ）」概念は、かなり「認識論的障害」であると考え。なぜなら、とくに、ポストモダン、ロスト近代、などと言われられるようになってから、多義的になりすぎている、からだ。これに対して、「現今資本主義」の諸局面といえばほとんど誤解が生じないとおもう。この諸局面として: 1. 「源蓄」＝「自由な」労働者の創出、が、大問題となる局面、2 「資本主義の“精神”」＝勤勉な労働者・禁欲的に再投資のみする資本家の創出、が、大問題となる局面、3 「流動性選好→有効需要の不足」が問題となる局面、イ 有効需要の不足を公共投資でおぎなう局面（いわゆるケインズ主義国家）、ロ トリックルダウンがた消費(Veblen)でおぎなう局面、ハ 横並び差異（上野）による消費で補う局面、ニ 自分探しの「本来主義」的消費「自然主義」的消費で補う（橋本?）局面、と大分類3、詳細分類6、の局面があると考えてみたい。しかも、このような「局面」分別は、フィクショナルな「理念型」であって、多くの社会・時代では、ゾンバルトが看破したように、主要類型以外の類型も併存している場合がほとんどなのである。そのため、「ポストモダン」も「ロスト近代」も、あらためて、「近代」のなかに「再発見」される場合が多い。たとえば、現今資本主義社会における社会意識は、ちょうど螺旋のように、回帰しつつ、また、前巡とはすこしこととなったように、「類似と種差」をもって進行していく、とみなせるかもしれない。文献: 橋本, 努. ロスト近代: 資本主義の新たな駆動因. 弘文堂, 2012, vii, 416pp./Laframboise, Donna 2011 “The delinquent teenager: who was mistaken for the world's top climate expert”. / yoshiosakuraig@gmail.com